ヨークの地理的認識
―中世イングランド北部地域における用法の変遷について―

鈴木　捺生

序章

5 世紀にアングル人、サクソン人、ジュート人らがグレートブリテン島に到来して以来、これらの諸族はイングランドに各々の国を建てて互いに争ってきた。やがて 8 世紀に入ると北欧からやってきたヴァイキングらの活動によってアングロ＝サクソンの国家はアルフレッド大王（Alfred the Great）の統治するウェセックス王国を除いて崩壊し、イングランド北東部にはヴァイキングの勢力圏であるデーンロウが形成された。11 世紀の初頭にはデーン人の王クヌート（Cnut）がイングランド王に即位してデーン朝を開き、ごく短い期間だが北海にまたがる帝国を築いた。1042 年にクヌートの血統が途絶えるとアングロ＝サクソンの王エドワード証聖王（Edward the Confessor）が即位し、1066 年の死に際してハロルド 2 世（HaroldⅡ）がその後を継いだ。ノルマンディー公ウィリアムはハロルド 2 世の即位に異を唱えて出兵し、ヘースティングズの戦いへと発展した。これに勝利したノルマンディー公ウィリアム（William of Normandyのち,William the Conqueror）はイングランド王ウィリアム 1 世として即位し、ノルマン朝が開かれた。

本論の基点となった史料であるドゥームズデイ＝ブックはイングランド王となったウィリアム 1 世がイングランドにおける支配権を確立するため、土地保有権の整備・確認を目的とした書物であった。この内、イングランドの北部に位置するヨークシャーのドゥームズデイ＝ブックにおいて、ブックの冒頭にある様々な記述の内、特に目を引くのが、特定の 10 人の人物の記述についてである。この 10 人についての考察は後述するが、10 人の中に

はヨークシャーのドゥームズデイ＝ブックであるにも関わらずヨークシャーに所領を保有していない人物が含まれている。この問題について考える場合、ヨーク、或いはヨークシャーという言葉が中世イングランドにおいてどのように使われていたのかを考えなければならない。よって本報告ではイングランド北部の都市および地域であるヨークとヨークシャーについて、先行研究を踏まえながらベーダのイングランド教会史とアングロ＝サクソン年代記の各記述を取り上げ、ヨークという語の変遷と位置付けについて考察する。

第１章　先行研究

本章ではまず中世イングランドにおける領域の研究と、本論で中心となるヨーク、ノーサンブリアの研究についてまとめる。領域の研究という点では赤沢計真氏の研究を基礎とし、ヨークやノーサンブリアについては英語圏の研究を概観していく。

第１節　日本におけるイングランドの封建制に関する諸研究

日本におけるイングランドの地方行政制度の問題について、赤沢計真氏の二つの研究を見てみたい。まずは、「イギリス中世地方行政と州共同体」をみてみよう。

ヘンリ２世（HenryⅡ）によりプランタジネット朝が開かれて以来、イングランドでは国家共通の法としてのコモン＝ローの整備が進められた。中世イングランドにおける王国統治の権力秩序は構成的支配、つまり政府たる王国と、下位区分である州と郡を結ぶ構造と、封建法に則り封土の授受関係に基づく封建的支配である(1)。

封建的支配に対し、構成的支配の面で統治に従事したのは在地的権限を担うシェリフ、州宰たちである。彼らの活動を担保したのは、シェリフが在地との間に形成した繋がりと、シェリフが結びついていた州共同体の存在である。コモン＝ローの特徴は、コモン＝ローがイングランド王国規模のラント法であると同時に、封建諸侯の領域的支配権を網羅する共通法であるという法の重層的構造があることだ。

しかしこれ自体はイングランドにおける特異的現象ではなく、ヨーロッパ中世法の普遍的現象である(2)。封建国家における所領構成は分散的・散在的

であり、この分散性は領域における統合的権力を前提とする。この統合性によりもたらされる領域的自立性を保障するのが領域不入権である。14 世紀初頭において令状還付権が領主の特権が既に成立しており[(3)]、これが不入権を構成した。中世盛期における領域不入権は、裁判権と結合した行政的権限でもあった。地域的慣習に根を持つ不入権はコモン＝ローと結びつき、コモン＝ローは時間をかけて地域的慣習を自身の法体系の中に包摂していった。地域的慣習とそれに基づく権利は法体系に位置づけられ、国制の中に組み込まれた[(4)]。不入権たる令状還付権は司法手続きにおいて行使が見られる。国王の裁判官は領主の同意を欠く限り領内に立ち入ることは出来ず、国王令状も適用されなかった。領主に対する令状をシェリフが国王より受理し、シェリフが領主のベイリフに手渡してベイリフが命令を執行した。封建諸侯領が自立的な領域性を持つのは王権との関係において適法上の位置づけを与えられてからだ。所領の分散性を保障する統合的な権力である王権は分散性と相対関係を取る。

王権の弱体化は分散性の強化につながる。エドワード 1 世（Edward Ⅰ）の時代には長期占有に基づく時効の成立と特許状の発給を名言している。イングランドの封建社会において特権領の問題とされたのはその「領域」性であった[(5)]。それは特権の権原から伺うことが出来、例えばイースト＝アングリアのベリ＝セント＝エドマンズ修道院はサフォークの 3 分の 1 に渡る特権領を保有し、王権の代行権を与えられた。この代行権が領域性を担保する。領主特権の総体が領域の法的基盤を成すのだが、領域支配権は本来領主の持つ権限の内、在地農民支配の権限を除く司法上・行政上の権限であるとされる。領域の歴史的形態は裁判権によって想定される。領域の範囲は領主の司法的権限により管理される部分により左右されていた[(6)]。

次に、「イングランド中世の国家権力と州共同体」をみていく。イングランドにおける州共同体と州法廷は、封建制度の属性とは異なる地縁的共同体の血を引く組織である。シモン＝ド＝モンフォール（Simon de Montfort）の議会以降、家産制的要素の濃い権力機構が整備されていった。州法廷による地方行政と地域的統治は王国の領域的支配の根幹である。州共同体は州を枠とする地縁的集団であり、州内貴族層の連合組織であった[(7)]。一方でパーラメントは国家権力の中軸を成すものであり、裁判機構が分離されて立法府

的性格を強めていった。州集会は州内領主層の連合組織[8]であり、シェリフにより主導された。シェリフは王権の公的機能を担当していた。州法廷の機構は、行政・財務と不定期に開催される州法廷での立法・司法の機能を有していた。この内、立法・司法の側を州集会と呼んだ。国王令状がシェリフの元に送付され、国王令状の内容が特権領の領主法廷において執行された。執行の結果は国王令状の裏に内容が記され、州法廷に報告される。州集会が諸権利の係争の場となったのは、12 世紀以来州集会が代巡回裁判の一環として行われたことに由来する[9]。州集会は州共同体の意思を反映する場であり、シェリフの主導で開催された。シェリフの元には州内王領から収納された貨幣が集められ、その収納・清算の場として州集会が利用された。また州集会は州共同体における実務を担当する機構であり、州集会そのものがある意味共同体であった。

一方で不入権を持つ有力特権領はシェリフによる国王令状に対抗しうる存在であった。シェリフは州内における国王代官の性格が強く、その権限には行政・司法・財務の多岐に渡っていた[10]。シェリフは財務府における貨幣の収納権限を管轄し、州内王領の貨幣の納入を財務府に報告する義務を負った。この点でシェリフは財務府の地方官である。シェリフは国王令状を受領し、その執行に当たり、被疑者の喚問、拘留、拘禁、捕縛、判決、執行を管轄した。これは国王の意思の代弁者・代行者にして行政と司法の権限を行使する者である。戦時には軍事権を発動して軍隊を徴募し、動員することも出来た[11]。

第２節　英語圏におけるヨークに関する諸研究

ロラソン（David Rollason）はその著書 *Northumbria, 500-1000* の中で、ヨークのみではなく、ヨークを支配したノーサンブリア王国に関する研究を残している。本節ではロラソンのノーサンブリア王国に対する研究・見解をまとめ、本論に必要な部分を取り上げる。

ロラソンはヴァイキングの襲撃と、ノーサンブリア王国の動向を結びつけて当時の情勢を論じている。9 世紀末にイングランド北部に進出したヴァイキングは、ティーズ川とタイン川の間の地域（ニューカッスルとミドルズバラの間）を領分として勢力を築いた。更にハンバー川まで南下し、ヨークを

支配圏内に収めた[12]。

これらの領域は10世紀に入るとエアドウルフ（Eadwulf, Earl of Bamburgh）という人物が管理するようになる。エアドウルフの拠点はヨークではなく、旧ノーサンブリア王国の中心地であったバンバラであった[13]。エアドウルフの後は、エアルドレッド（Ealdred, Earl of Bamburgh）と彼の一族が継承していった。カンブリア地域[14]は記録こそ無いものの、ヴァイキングの襲撃はなされていたと見られる。同地の地名にはノルウェー語の要素が非常に多い。10世紀初頭より、これらの地域はカンブリア人の王と自称する人々によって支配されてきた[15]。これはノーサンブリア王国よりカンブリアが分裂したことであり、ノーサンブリア王国崩壊の始まりでもある、とロラソンは位置付けている[16]。

ヨークのヴァイキング王国は、豊かなフロンティアと政治的構造を持つ王国であると捉えられているが、その内実はヴァイキングとヴァイキング文化の影響を深く受けており、前身のノーサンブリア王国とはかなりの違いがあったと思われる。ヨークをヴァイキング王国の首都であると主張するリチャード＝ホール（Richard Hall）は、ヨークがヴァイキング世界において最も発展した都市のひとつであると述べている。更にホールは、イングランド人の傀儡の王を廃してヴァイキングが王に取って代わったと続ける[17]。

この観点によるならば、最早ノーサンブリアの歴史からは外れてしまっているし、結果としてノーサンブリアはヴァイキング世界の一部として繁栄していったことになる。このことはヴァイキングによるヨークの攻囲はノーサンブリアにおけるヨークの終焉であり、また新たな政治的単位であるヴァイキング王国としてのヨークの始まりを示す。

しかし、まず如何なる史料においてもヴァイキングの王との関連でヨークの王国なる表現は出ないし、言及される場合は単に包囲されたヨークの王か、あるいはノーサンブリアの王として言及される。またヴァイキングによるヨークの包囲からヴァイキングの王国が始まったという証拠もまた存在せず、ヨークの包囲直後から誰がヨークを支配していたのか名前も伝わっていない[18]。

このような史料上の限界や内在する問題を補って考えるために、地名・人名は重要な要素になりうる。ヨークシャーのドゥームズデイ＝ブックにお

ける人名には古ノルド語の要素が見られるが、彼らがノルマン＝コンクェストの後に、イングランド系の名前に改名していく潮流の中でノルド系の名前を残し続けたヴァイキングのエリートたちなのかは分からない。スカンディナヴィア系の地名は、ヨークシャーでは主流的ではないものの、イングランド全域に広がっている。しかし近年の研究においてはスカンディナヴィア系の地名であっても最早同地をヴァイキングによる定住地と見なす必要はなくなってきている(19)。

ロラソンはカンブリア地域の離反という形でノーサンブリア王国の領域に対する見解を示しており、ヨークにおけるヴァイキングによる文化的影響はあったものの住民に対する影響は無かったとする。また地名と人名から領域への観点を示す。しかし政治的区分としてのヨークシャーへの言及は見られない。

パリザー（D.M. Palliser）は著書の *Medieval York 600-1540* の中で、中世のヨークに関する研究を行っている。彼の研究のなかから、ヨークの領域性に関わる見解をまとめてみたい。

アングロ＝サクソン年代記では 866 年から 867 年におけるヨークの攻囲に関する記述が残っている。この時ヴァイキングはヨーク市街を包囲し、更にその後当時ヨークを支配していたノーサンブリア王オズベルト（Osberht, King of Northumbria）とアエラ（Ælle, King of Northumbria）の軍を撃破している。この二つの戦いはヨークに破壊と屈辱をもたらした(20)。ヨークの人々は恐らく奴隷になったであろう。ヴァイキングの指導者であったイヴァルル（Ivarr）は 871 年に、ダブリンへ多くのイングランド人奴隷を連れて行ったとされる。またダラムのシメオン（Symeon of Durham）はヴァイキングによる教会と聖堂の破壊を記録している。しかしパリザーはこのヴァイキングによるヨークの破壊は誇張されているものであり、実際においては少数の破壊に留まり、また地名や人名の観点からスカンディナヴィア系の移民が相当数あったと考えている(21)。他の地域では、同時代においてスカンディナヴィア的特性がほとんど見られないが、ヨークにおいては積極的に受容された。ヴァイキングにより征服されたノーサンブリア人たちが、南からのウェセックス王国の拡大に対してヴァイキングの特性を受け入れることで、自らのアイデンティティとしたからである(22)。

11 世紀時点においてヨークは間違いなくイングランド行政における中心拠点のひとつであった。イングランド中部と北部の両地域は徐々にウェセックス式の統治モデルに切り替えられていったが、およそ 1050 年ごろまでヨークシャーは記録に名前が見られない。おそらく 1000 年代にこのモデルチェンジが行われたのだろう[23]。ヨークシャーは細分化されたシェリフの単位ではなく伯（earl）の単位で管轄され、ノーサンブリア伯シワード（Siward, Earl of Northumbria）[24] の伯領はヨークシャーだけでなく、ランカシャー及びノーサンバーランドを含む広大な範囲を包括していた。

以上のことから、パリザーはヴァイキングによるヨーク王国については懐疑的な態度は取っており、また一方でダブリンとの、アイルランドとのつながりがあったことは明言している。ウェセックス王国がヨークを併合すると、旧ノーサンブリア王国が二人の伯によって分割されたとする。ヨークシャーに対する言及もあるが、いかなる過程でヨークシャーが生まれ、そして具体的な範囲の提示にまでは至っていない。

タウンエンド（Matthew Townend）は著書 *Viking Age Yorkshire* の中で、ノーサンブリア王国の範囲と、今日ヨークシャーと呼ばれる地域の範囲との関係性に着目している[25]。

レスリー＝エイブラムス（Lesley Abrams）は 10 世紀のヨークシャーを支配したスカンディナヴィア系の支配者たちが、ヨークやダブリンといった行政拠点、権力の中心である都市をそれぞれ移動しながら統治したと主張した[26]。言い換えればスカンディナヴィアの支配者たちはブリテン島とアイルランドにまたがる広範な地域に関与し、支配社会に文化の混交をもたらした。

11 世紀におけるラムジーのビルトフェルス（Byrhtferth of Ramsey）の作品、『聖オズワルド伝』（Life of St Oswald）の一節でヨークは 3 万人もの人々が暮らす都市と描写されている。タウンエンドはビルトフェルスの人口 30000 人という点を懐疑的に見ているが、ヴァイキングのヨーク到来以来、都市には移住者が多く訪れてかなりの人口増加が見られた。現在ではおそらく当時のヨークの人口は 1 万から 1 万 5 千程度であり、ヴァイキング以前はこの 10% にも満たなかったと考えられている[27]。

ヨークシャーの地域区分であるライディング[28]の境界線はヨークの位置

で合流している。このことから下位区分としてのライディングはシャーとしてのヨークシャーが成立してから設定されたと考えられる[29]。しかし下位区分として古ノルド語由来の言葉が行政区分に採用されているのは驚くべきことであるとタウンエンドは主張する。古ノルド語由来の単語が採用された理由として考えられるのは、一つは 11 世紀時点のヨークシャーにおいては古ノルド語の話者や言語が優勢であったということだが、これは年代記において古英語由来の言葉を採用していることと背反する。もう一つは、ライディングという区分自体はシャーの成立以前から存在していたという考えだ[30]。

タウンエンドはヨークとノーサンブリアの同義的な意味合いを提示し、地名からヨークとヨーク周辺における領域の概念を想定した。そして行政単位としてのヨークシャーに着目し、ヨークにおける古英語と古ノルド語の関係性について考察した。またライディングというヨークシャーのドゥームズデイ＝ブックにおける行政的な下位区分に言及している。

日本国内におけるイングランド史、特に地域性に関する研究はプランタジネット朝以降のものが多く、ノルマン朝或いはそれ以前における社会に着目した研究は乏しい。一方で英語圏においてはヨークやヨークシャーに関する研究はヴァイキングとの関係に注目し、ヴァイキングによる発展を肯定する研究と否定する研究が存在している。したがって、このようなヴァイキングの関与による社会や制度の変容について、より丁寧に議論を進めていく必要がある。

第２章　ヨークの 10 人とノルマン朝以前のヨーク

本省ではウィリアム 1 世が製作を命じた土地保有権証書の集成であるドゥームズデイ＝ブックにおいて、ヨークシャーのドゥームズデイ＝ブックの冒頭に記載された 10 人の人物に関する特権が何なのか、また、ノルマン朝以前のヨークの情勢がどのようであったのかについてまとめる。ヨークシャーのブックに記載された 10 人の内何名かは所領をヨークシャーに保有していないにも関わらず、ヨークシャーのブックに同地で特権を保有していたことが記載されている。この事についてブックの記述を手掛かりとして 10 人の背景について考察する。

第１節　ヨークの 10 人

本論の起点とも言える、ヨークの 10 人について改めてまとめておきたい。ヨークシャーのドゥームズデイ＝ブックにて、エドワード証聖王の名の下に、種々の権利を保有し、国王もしくは earl からの罰金しか払わなくて良いと記述された特殊な権利を持つ人々が 10 人挙げられている。 それは上から伯ハロルド（Earl Harold）、メルレ＝スヴェン（Mærle-Svainn）、ウルフ＝フェンマン（Ulf Fenman）、トルゴット＝ラグ（Thorgot Lag）、アウティの息子トキ（Toki son of Auti）、エドウィン（Edwin）、モーカ（Morcar）、オズベオルトの息子ガマル（Gamal son of Osbeorht）、コフセ（Kofse）、クヌート（Knut）と、書き連ねられている[31]。通常、ドゥームズデイ＝ブックは初めに土地保有者のリストが記述される。これはどの州においても共通する様式であり、このヨークシャーの 10 人の記述のように、エドワード証聖王の時代の特権を記載しているのは珍しい。またドゥームズデイ＝ブックに記述されるということは、言外にこれらの証聖王時代の特権を全て否定するという意味が含まれている。なぜ冒頭にこのようなことが書かれているのかについては本節の末尾において述べていきたい。まず述べていきたいのはこの 10 人が如何なる人物であったのか、どのような来歴を持っているのかである。よって初めにこれら 10 人についてどのような人物であったのかを考えていく。

伯ハロルドは 1066 年に逝去したエドワードの後を継いでハロルド 2 世になる人物である。ブックにおいてハロルドに対して使われている称号は一貫して伯を意味するラテン語の comes であり、王を意味する rex が用いられてはいない。このことはブックの作成時において、ウィリアム 1 世側がイングランド王位を継承するに当たってハロルドをエドワード証聖王の後継者として、イングランド王として認めないという姿勢を現していると考えられる。また審問調査時に、在地社会がウィリアム 1 世を刺激しないために、ハロルドを王として認めず、comes とする点を倣った可能性もある。このハロルドはグロスターシャー[32]において特に大きな所領を持っていた。それ以外にもチェシャー[33]からシュロップシャー[34]、ヘレフォードシャー[35]にかけて各州の内、ウェールズと境界を接するいくつかの地域にハロルドは所領を保有していたことがドゥームズデイ＝ブックの記述より分かる。加

えてサマセット[36]からデヴォン[37]、コーンウォール[38]に至る南西部地域にまで広い所領を有していた。この南西部地域における保有地は、父親のゴドウィンから引き継いだウェセックスの伯領であり、同地においては在地社会との繋がりも他地域と比べて強く、勢力の中心地であったと思われる。エドワードの後継者とも目され、また父親であるゴドウィンは生前エドワード証聖王の地位を脅かしうるほどの所領を保有していた点から、ハロルドが広大な所領を保有していたのは当然のことと言える。

メルレ＝スヴェンはエドワード時代には特権を有する人物であった。リンカーンシャーのシェリフであったメルレ＝スヴェンはリンカーンシャー[39]、ヨークシャー[40]から南西部のグロスターシャー[41]、コーンウォール[42]にかかる広い所領を保有していた。メルレ＝スヴェンも含め、以下の人物たちはノルド系の名前を持つものの、恐らくデーンロウに定住していたノルド系 2 世、3 世の人物であったと考えられる。ウルフ＝フェンマンは主にリンカーンシャー[43]などイングランド中部において領地を保有していた人物である。ウルフ（Ulf）という名前もまた北欧ノルド系の名前であることから血筋としては北欧にルーツを持つ人物であったと考えられる。ウルフ＝フェンマンは他の 9 人と比べて、イングランド中部に土地を保有しているのが特徴である。これについて、イースト＝アングリアにデーン系ヴァイキングが進出していたことから、デーンロウの伸長に伴って海岸部だけでなく内陸まで繋がりが出来ていた可能性はある。トルゴット＝ラグはリンカーンシャー[44]に所領を保有しており、名前の綴りにある Thor という綴りはノルド系の人々が用いていたことからも恐らくはノルド系の人物であっただろう。アウティの息子トキは、リンカーンシャー[45]にて所領を保有していたことが分かっている。Auti という名前はノルド系の名前であり、その一族であるということから、トキもまたノルド系の系譜に連なる人物であっただろう。

エドウィンとモーカは兄弟であり、両者ともにマーシア人の伯（Earl of Mercia）エルフガ（Ælfgar）を父親に持つ。エドウィンは父親のマーシア人の伯を継承し、特にチェシャー からシュロップシャー[46]、ヘレフォードシャー[47]の各州に所領を保有していた。モーカはエドウィンの弟で、ハロルドの弟トスティ（Tostig）が持っていたノーサンブリア人の伯（Earl of

Northumbria）を継承した[48]。所領はヨークシャー[49]からチェシャー[50]、シュロップシャー[51]からヘレフォードシャー[52]までの地域に及んでおり、トスティの所領の分布する範囲は、エドウィンのそれと概ね重なっている。しかしながら、マーシア人の伯であるエドウィンは独自の伯領を、またノーサンブリア人の伯であるモーカもまた独自の伯領を保有していた。エドウィンとモーカの伯領は、ゴドウィン - ハロルドの伯領に次ぐ広さと豊かさを持っていた。両者は伯の称号を持つ点でハロルドを除く他の人物とは異なり、1066 年のフルフォードの戦いではハロルドの指令を無視してトスティとノルウェー国王ハーラル 3 世（Harald Ⅲ , King of Norway, 或いは Harold Hardrada）の連合軍に対して単独で戦いを挑み、結果として敗れている[53]。またその後、1066 年のヘースティングズの戦いの際、ハロルドから召集を受けたが、これを無視してヨークシャーに引き篭っていた点を鑑みるに、ハロルドとの関係は冷え切っていたかあるいは、主君と従者の関係ではなく同盟者のような立ち位置にあったと考えられる。事実、エドウィンの妹がハロルドに嫁いでおり[54]、エドウィンとハロルドは姻戚関係にあった。よってエドウィンの認識が王と臣下というより、王とその外戚という認識であったとしても決して不思議ではない。とはいえ単純にフルフォードの敗戦の痛手から回復し切っておらず出兵できなかった可能性も十二分にある。

オズベオルトの息子ガマルはヨークシャー[55]において所領を保有していた。しかし、ガマルという名前の人物はドゥームズデイ＝ブックにおいては散見される名前であり、また 10 人のほとんどが所領を取り上げられている中、所領を安堵されているガマル[56]もおり、実態が掴みづらい。ドゥームズデイ＝ブックの記述では、ガマルはどれも Gamal としか記述されていないが、恐らくガマルという人物は審問調査時に複数いたと考えられる。またオズベオルトの中にある beorht という綴りはアングロ＝サクソン系の綴りに当たり、ガマルは純粋なノルド系とは言い難いとも言える。コフセとクヌートの二人はガマル以上に実態がぼやけている。両者はリンカーンシャー[57]において所領を持っているのが確認できるが、その数は決して多くは無い。しかしコフセは現代のノルウェー人に同様の綴りの名前があることから恐らく由来としてはノルド系の人物であったと思われる。クヌートについても、Knut というのはいわゆるクヌート 1 世の Cnut の異綴りであることか

ら、これもまたノルド系と見られる。10 人はどれも大なり小なり土地保有者であることは当然のことであるが、ハロルドやエドウィン、モーカといった大土地保有者だけでなく、コフセやクヌートなど、決して広い所領を保有しているとは言えない人物も含まれている。しかしながらこの 10 人たちはウィリアム 1 世による征服後には姿を消していく。

ドゥームズデイ＝ブックの記述を見ると、ヨークの 10 人は例外なくエドワード証聖王の時代からウィリアム 1 世の時代に変化する時にその土地保有権全てを失っている。彼らはあくまでドゥームズデイ＝ブックでは「エドワード証聖王の時代の」保有権者であり、ブックが作成された 11 世紀後半時点では全く実権を伴った形として存在していない。彼らを過去の保有権者として明記しなければならなかったのは、ヨークの 10 人が持つ保有権がウィリアム 1 世の時代においては無効であることを強調・証明するためであり、保有権の否定というのがその大目的であった。加えてアウティの息子トキのような、ヨークシャーのブックに土地保有権者として明記されず、ブックの冒頭にのみ登場する者もいる。ドゥームズデイ＝ブックの史料的性格を考えると、各州の保有権を明確にして各地をウィリアム 1 世の統治構造・王権に組み込むために作られたにも関わらず、当該州、つまりヨークシャーと無関係な人間が明記されているのは特殊な事例であると言える。この理由について考える場合、徴税権に関する記述があることに着目する必要がある。

ヨークの 10 人は罰金以外の租税から逃れられる立場とされており、その免税特権がブックの記述で強調されている。ヨーク、或いはヨークシャーという地域を考えた場合、さしあたっては、これらの地域で税を請求できる立場にあるのは教会、ひいてはヨークの大司教であろう。ヨークの 10 人の中にはヨークシャーに土地を保有しない人間が含まれているものの、彼らがわざわざブックの記述の中で登場するのはヨークやヨークシャーと呼ぶべき地域との間に何らかの関わりがあったものと考えられる。何故ならドゥームズデイ＝ブックの作成過程を考えた場合。ブックはまずウィリアム 1 世により派遣された聖職者から成る審問調査の一団によって情報が収集される[58]。この時、在地社会からヒアリングを行って土地保有権者の確認を行うのだが、この審問調査の際に在地社会から名前が挙げられるということは、現地の記憶の中に 10 人の情報があったはずだ。何らかの関わりを持っていなけ

れば、審問調査時に名前が挙げられることもないだろう。ヨークの10人が実際にヨークシャーに土地保有をしていたか、またヨークに在地の領主であったかは定かでは無い。そのような状況にも拘わらず10人の名前が登場するのは、ヨーク大司教の管轄する領域との関係性があるのではと考えられる。以上のことから、ヨークシャーのドゥームズデイ＝ブックにおいて他のブックと比べて特異な点であるヨークの10人の存在によりヨーク大司教の権威が及ぶ範囲を漠然とヨークシャーと捉えていた可能性がある。ブックではヨーク大司教による徴税権、つまりはヨーク大司教の権威が及び得る範囲をヨークシャーと定義していたと言える。その点では、ドゥームズデイ＝ブックの作成時点においてはヨークやヨークシャーの定義をどのように扱うのか、まだはっきりとしていなかったことがうかがえる。

第２節　ノルマン朝以前のヨーク

アングロ＝サクソン人がブリテン島に侵入した時、最初にヨークに割拠したのはアングル人の一派が建てたデイラ王国である。デイラ王国は当時イングランド北部に住んでいたブリトン人を征服して成立した王国で、後に北方に成立したバーニシア王国と合併してノーサンブリア王国となった。ヨークを整備したのは616年に即位したノーサンブリア王エドウィン（Edwin, King of Northumbria）である。エドウィンはノーサンブリア王国にキリスト教を導入してヨークに木製の教会を建設した[(59)]。その後ヨークはノーサンブリア王国の南方の首都として機能した。

9世紀以降、ヴァイキングの侵入が激化するとヨークにもたびたびヴァイキングがやってくるようになる。アングロ＝サクソン年代記において大規模な襲撃として記録されているのは867年にあったヨークの攻囲である[(60)]。折りしもノーサンブリアではノーサンブリア王オズベルトと僭称者アエラとの内戦中であり、両者ともにヴァイキングの前に敗死している。アングロ＝サクソン年代記はヴァイキングによるヨークの破壊を強調しているし、またダラムのシメオンはヨークの教会が散々に破壊されたと記録している[(61)]。しかし、実際に戦火による破壊はあっただろうが、ヨークが廃墟になるほどのものではなかったと考えられる[(62)]。リチャード＝ホールは866年からヴァイキングはヨークに傀儡の王を設置したと主張している[(63)]。そ

してヨークはイングランド北部に成立したデーンロウの一都市として、入植してきたヴァイキングによるスカンディナヴィア化が推し進められていった。

過去にイングランド北部にはヴァイキングの王国があり、ヨークはヴァイキング王国の首都として機能したという論があった(64)が、ロラソンはヨークがヴァイキング王国の中心地であったとする説について否定的な見解を示している(65)。ヨークはそもそもヴァイキングの広大な勢力圏の中に存在する一市街に過ぎず、それはヴァイキング時代におけるヨークの支配者がヨーク大司教であったというロラソンの見解に基づく。ヨークの支配者であるヨークの大司教という点については後述するが、少なくともヨーク大司教がヨークという市街の代表者として存在していたことは、947 年におけるウェセックス王エアドレッド（Eadred, King of English）の交渉相手がノーサンブリアの評議会、そしてヨーク大司教であったことからうかがえる(66)。またタウンエンドはヨークとヨークシャーの諸地域とのつながりは、ヴァイキング時代以降に造成されていったと主張する(67)。アングロ＝サクソン時代、或いはアングル時代におけるヨークとヨークシャーとの関係を探ることは史料上の欠落からほぼ不可能に近い。ヨークを中心とするヨークシャーという地域は、ヨークを中点とした衛星都市との結びつきで発生する。ヨーク周辺にある Conis という地名の要素は王を意味し、Conis を持つ都市（Coneysthorpe、Conistun、Conisborough、Conistone、Cold Coniston など）は、古英語で王を意味する cyning が置換されてものであると考えられている。従ってこの Conis を持つ都市を周縁としてヨークの王領地が形成されていたと思われる(68)。

行政単位としてのヨークシャーは、おそらく英語話者によって作り出された。というのも、アングロ＝サクソン年代紀においてヨークシャーの言及が見られるのは 11 世紀半ばからであり、Eoforwicscir と記載される(69)。これは古英語の形式であり、行政単位としてのヨークシャーが英語話者により作られたことを裏付ける(70)。しかしヨークシャー内部における行政単位であるライディングは、古ノルド語のスリズユングル þriðjungr に由来する(71)。ライディングはヨークシャーのドゥームズデイ＝ブックが初出である。そこにはノースライディング、イーストライディング、ウェストライディングの 3 つが記載されている。しかしこれ以前にライディングに言及

した史料がないため、なぜライディングがブックで採用されたかは知る術は無い。

イングランドは10世紀頃にウェセックス王国のアゼルスタン（Æthelstan, King of English）により統一されるが、ヨークがウェセックス王国の支配を受けるのは、名目上では920年、ヨークを支配していたヴァイキングのラグナル（Ragnall, King of Viking Deira）がウェセックスの王、エドワード長兄王の上位王権を受け入れてからである(72)。しかし、ラグナルの後継者であるシトリック1世（Sihtric Ⅰ, King of Viking Deira）はエドワード長兄王の後継者アゼルスタンに対して南方へ勢力を広げた。シトリック1世の死後、アゼルスタンは北上してヨークを攻囲し、ヨークの城壁を破壊した(73)。927年前後にはヨークはアゼルスタンの上位王権を受け入れていたと見られる。939年にアゼルスタンが死ぬと、ヨークはアイルランドのダブリン王オーラフ＝グスフリスソン（Olaf Guthfrithson, King of Dublin and York）に攻撃された。またオーラフ＝グスフリスソンの死後ヨークは再びウェセックス王の上位王権を受け入れた(74)。この時のウェセックス王はエアドレッドであるが、947年、ヨーク大司教はノルウェー王エイリーク1世（Eric Bloodaxe, King of Norway）を新たな支配者として受け入れた。以後、ヨークはエイリーク1世、エアドレッド、ヴァイキングのオーラフ＝シトリックソン（Olaf Sihtricson, King of Viking Deira）と、支配者を転々とする。ウェセックスによるヨーク支配が確立するのは954年、エアドレッドがエイリーク1世を敗死せしめてからである。エアドレッド、そしてエドガー（Edgar the Peaceful）はイングランド南部の人材をヨークへ送り込むようになる。エドガーは973年、ヨークで製造されるコインにrex anglorumの称号を加えさせた(75)。この時点でヨークはウェセックスの勢力圏に組み込まれたと見てよいだろう。

11世紀に入るとデーン人の支配の後、ヨークはエドワード証聖王の廷臣、シワードの伯領に組み込まれた(76)。シワードは義兄弟ラシールのエイリーク（Eric of Hlathir）よりイングランド北部の伯領を受け継いだ人物で、この継承はクヌートにより行われたものであった。シワードの死後、伯領はエドワード証聖王によりトスティ＝ゴドウィンソンへと引き継がれた(77)。しかし、トスティはイングランド北部の有力者とそりが合わず、1063

年と1065年においてヨークの宮廷で発生したトスティによる殺人事件は北部の反乱を招いた[78]。エドワード証聖王はヨークの10人の一人である、マーシア人のモーカをノーサンブリア人の伯とすべしというヨーク側の主張を受け入れ、モーカをノーサンブリアの伯としてヨークを含む北部の広大な伯領を治めさせた[79]。1066年、ヘースティングズの戦いでノルマンディー公ウィリアムが勝利し、ウィリアム1世としてイングランド王に即位するとヨークもノルマン朝の版図に組み込まれた。

アングロ＝サクソン時代のヨークは以降の時代に比べて重要性が高かったとは言い難いが、ヴァイキングの襲来以降イングランド北部の重要都市へと変化していった。ヴァイキングの勢力圏の拠点であり、ウェセックス朝が台頭してからはイングランド王国とヴァイキングとの間で係争地ともなった。加えてヨークには大司教座が置かれており、イングランドのキリスト教会の中では重要な地位にあったと考えられる。またヨーク大司教はヨーク市街の代表者という位置づけであったことも窺える。また、ドゥームズデイ＝ブックの記述よりヨークの10人のような存在があることから、11世紀でのヨーク、ヨークシャーの位置づけが他の地域と比べて特異な場所にあったと推測できる。

第３章　イングランド教会史とアングロ＝サクソン年代記のヨーク

本章ではベーダの著した『イングランド教会史』と、古代から中世にかけてのイングランド地域の歴史をまとめた『アングロ＝サクソン年代記』を史料とし、ヨークという語を抽出してその周辺の記述と合わせ、どのような用法が成されているかを考察する。また先行研究におけるヨークに対する見解と比較し、ヨークが史料の中でどのように捉えられてきたかを検討する。

第１節　イングランド教会史におけるヨーク

ここではベーダ＝ヴェネラビリスの手による『イングランド教会史』における「ヨーク」の示す地理的範囲の変遷をみていく。イングランド教会史において、年代記と同じく伝説上の時代とローマン・ブリテンを除いて、ヨークが記述として現れるのは590年ごろ、教皇グレゴリウス1世（Gregory Ⅰ,Pope）がメルリトゥス（Mellitus）、ジュストゥス（Justus）、パウリヌ

ス（Paulinus）、ルフィニアヌス（Rufinianus）らにパリウムを持たせてイングランドへ派遣し、ロンドンとヨークに司教を置くように通達した[80]。続いて626年、この記述は年代記と時期の共通した数少ない記述である。年代記の記述の違いは、ノーサンブリア人の王エドウィンが司教位を設置したこと、パウリヌスが司教となって6年間、王の承認の下、ノーサンブリアにて説法を続けたということだ[81]。続く記述は627年から631年の間に起きた出来事である。ここでは教皇ホノリウス1世（Honorius Ⅰ,Pope）の書簡の中でヨークが現れる。この書簡において、カンタベリーかヨークの司教のどちらかが亡くなった際、残った方が亡くなった方の司教を任命することを通達した[82]。この書簡のおかげで叙任に際してローマまで伺いを立てる必要がなくなったとベーダは記述している。633年、グウィネズ王キャドワラ（Cædwalla, King of Gwynedd）がマーシア人の王ペンダ（Penda, King of the Mercians）と共にノーサンブリア王エドウィンを破り、敗死したエドウィンの首がヨークにある聖ペテロの教会に埋葬されたとしている[83]。またパウリヌスの助祭ジェームズがキリスト教の説法を続け、ヨークにおける信仰を保ったとしている[84]。660年代の出来事として、ノーサンブリア人の王オスウィウ（Oswiu, King of Northumbrians）がヨークの司教にするために司祭であったマーシアのシャド（Chad of Mercia）をケントへ派遣したことが記述される[85]。シャドは664年にヨーク司教に叙任されるが、この叙任をベーダは緊急の措置であったかのように記述している[86]。また、いつごろかは断定できないが7世紀ごろに、ウィルフリッド（Wilfrid of York）がヨークの司教位と、ノーサンブリア、ピクトランドの司教位を管轄していたとベーダは記録している[87]。678年、デイラ王国とバーニシア王国にそれぞれ司教座が設けられ、ヨークはデイラ王国の司教座として設置され、ボサ（Bosa of York）が司教となったとされる[88]。ボサ、更にバーニシア王国の司教となったエアタ（Eata of Hexham）はカンタベリー大司教テオドール（Theodore of Tarsus, Archbishop of Canterbury）によりヨークにおいて叙任された。685年、この記述も年代記と時期が重複した記述である。ベーダは685年、リンディスファーンの修道士であったクスベルト（Cuthbert of Lindisfarne）がリンディスファーンの司教に叙任されたとしている。この時の記述では、ノーサンブリア人の王エクグフリ

ス（Ecgfrith, King of Northumbrian）の御前にて教会会議が行われ、また満場一致で決められたとする。そして、クスベルトを修道院から引きずり出すために、多くの使者と書簡が送られ、最終的にエクグフリスが修道院に赴き、王がクスベルトに跪いてようやくクスベルトを司教位につけることが出来たという。クスベルトの叙任はヨークで行われ、更にエクグフリス王の御前で行われた(89)。この、クスベルト叙任をめぐる記事、アングロ＝サクソン年代記との記述の間に大きな差異が認められるが、これについては後述する。これ以後の記述はベヴァリーのジョン（John of Beverley）がヨークの司教に任じられたこと(90)、ノーサンブリア人の王セオルウルフ（Ceolwulf, King of Northumbrians）の治世においてウィルフリッド 2 世（WilfridⅡ）がヨークの司教であったことが記述される(91)。ベーダの記述で一貫していることは、ベーダは常にヨークをイングランド北部における司教座か司教区として捉えて記述していることである。

まず間違いないのは 900 年の 10 年前後でヨークは急速に発展したということだ。890 年代から継続して打造された貨幣は、急速に文字、キリスト教を受け入れ、先進的な行政機構を取り入れたヴァイキングの王たちの証拠として見られてきた(92)。司教座であったことがヨークの発展に寄与したということは、ノーサンブリア人の王エクグフリスがクスベルトの司教叙任を求めて自ら赴いた点からもうかがえる。パリザーは以前ヴァイキングの影響によりヨークが発展したと主張した。パリザーは、870 年代から 950 年代における一般的な見解としてはヨークを中心としたヴァイキングの政権があり、境界は組織された行政により規定されていると述べている(93)。史料上の制約はあるものの、ヨーク王国それ自体への証拠は、希薄なものであり、大部分は都市の歴史に絡まない。史料はヴァイキングの王とのつながりにおいて、ヨーク王国という表現を用いたことはない。870 年代の半ば以来、ヴァイキングたちは傀儡の王を直接統治の為に廃したことが分かっている(94)。あくまでもパリザーはヨークにおけるヴァイキングの王国そのものを肯定するということはしていないものの、ヴァイキングが直接ヨークの発展に大きく寄与したというのは過剰な表現であると主張する。一方でヨークの支配者たち、パリザーの言葉を借りれば「ヴァイキングの王たち」は間違いなく貴族たちの手綱を握るために教会の権力と協同したのは間違いないと

しており、ヨークにおける教会ひいては司教の果たした役割については肯定的に捉えている[95]。

第２節　アングロ＝サクソン年代記におけるヨークの記述

伝説上の時代やローマン＝ブリテンを除き、アングロ＝サクソン、つまりはイングランドにおけるヨークの記述の初出は、626 年における記述である。そこにはノーサンブリア王エドウィンに娘が産まれ、ヨーク大司教パウリヌスに依頼してヨークで洗礼を受けさせたことが記録されている[96]。この記述ではヨークは都市として、あるいは教会としてのヨークが示されている。続いて 685 年の記述にヨークが現れる。この年、ノーサンブリア王エクグフリスがリンディスファーンの修道士クスベルトに司教になるよう要請し、大司教テオドールにより「ヨークにおけるヘクサム」の司教に任じられた、とある[97]。ここにおけるヨークは、626 年の記述に比べて広い範囲で受け取られている。ヘクサムは都市ヨークの北方、ダラムを更に越えてニューカッスルの西方に位置する集落で、仮にこの記述をそのまま受け取るならば、ヨークという言葉がかなり広い範囲を包含して使用されていることが分かる。8 世紀に入ると、738 年にノーサンブリア王エアドベルフト（Eadberht, King of Northumbria）が 21 年の治世の後にヨークに埋葬されたこと[98]、741 年にヨークが焼け落ちたこと[99]、766 年にヨークにて大司教エグバート（Egbert, Archbishop of York）が亡くなったという記述が続く[100]。これらの記述におけるヨークは都市的集落を指し示しており、その点 626 年の記述と同義的である。しかし 774 年の記述はやや毛色が違うように思える。この年、ノーサンブリア人たちがヨークから彼らの王アルレッド（Alhred, King of Northumbria）を追放し、エゼルレッド（Æthelred, King of Northumbria）を新たな支配者として迎え入れたとある[101]。この記述で主格であるノーサンブリア人という言葉が問題で、何をもってノーサンブリア人と規定するのか、という点に疑問が残る。仮にノーサンブリア王国というべき領域に暮らしている人々とするならば、このヨークは単なる都市ではなく、ノーサンブリア王国という領域そのものを表している可能性がある。続いて 777 年、ウェセックス王キュネウルフ（Cynewulf, King of Wessex）がマーシア王オッファ（Offa, King of Mercia）と争い、オッファ

がベンソンの地を得た。そこでオッファはヨークにおいてウィットホーンの司教にエゼルベルフト（Ætherberht, Bishop of Whithorn）を叙任したと記述される[102]。また、782 年においてエゼルベルフトがヨークで亡くなったことが記述される[103]。どちらも都市的集落としてのヨークを指す例である。796 年の記述は大司教エアンバルド（Eanbald, Archbishop of York）が亡くなり、ヨークに埋葬されたと記述される[104]。9 世紀に入るとヨークの記述はそれ以前に比べて急激に少なくなっていく。867 年、ヴァイキングの船団がノーサンブリアのヨークへやってきてノーサンブリアの軍勢と激突したことが記録されている。オズベルトとアエラの両王が敗死したノーサンブリア人はヴァイキングと和平を結んだ[105]。ノーサンブリアのヨークは、すなわちノーサンブリア王国の都市としてのヨークであろう。また 2 年後の 869 年、ヴァイキングの一団がヨークへやってきて 1 年滞在したという[106]。これは都市としてのヨークと捉えて良いだろう。

10 世紀の記述から、ヨークという言葉の性格に変化が生じてくることが分かる。918 年、アングロ＝サクソン年代記の一種であるアビンドン年代記においてアルフレッド大王の娘にしてマーシア人の女伯エゼルフレーダ（Æthelflæd, Lady of the Mercians）がレスターの城塞を攻略し、ヨークの人々を服従せしめたとする[107]。923 年、ヴァイキングのラグナルがヨークでの戦争に勝利した[108]。948 年、同じくアングロ＝サクソン年代記の一種であるウスター年代記において、ウェセックス王エアドレッドがウェセックスへの帰国中にヨークの軍勢に背を撃たれ、散々に打ち負かされ、その後、ノーサンブリアを再征服しようとしてヨークの人々がエアドレッドに降伏したことが記録されている[109]。10 世紀におけるヨークの記述は以上になるが、共通していることはどれもヨークという言葉が「都市」としてのヨークから、「領域」を指す言葉を意味して使用されていることだ。年代記上でヨークという言葉の意味合いがここから広範なものとして扱われていく。11 世紀に入ると、ヨークシャーという言葉が登場する。1016 年、クヌートがイングランドを北上してヨークを目指したとある[110]。年代記が作成された時点ではおそらくヨークシャーという政治的領域が発生していただろうが、この時前後の記述を考えるにクヌートはヨーク市街を目指したと捉えられる。1041 年、ウスター年代記の記述によれば、エゼルリック（Æthelric,

Bishop of Durham）がヨークにおいてダラムの司教に任命され[111]、1055年にアビンドン年代記では、伯のシワードがヨークで亡くなったことが記述される[112]。これはどれも都市としてのヨークである。1064年、先述したノーサンブリア人によるトスティの追放が記述される[113]。イングランド人とデーン人たちがヨークの武器や財産を強奪したとある。つづいて1066年、エドワード証聖王の死に際してハロルド＝ゴドウィンソンがヨークからウェストミンスターへと移動したことが書かれる[114]。1068年、ウィリアム1世が軍勢を率いてヨークに入ったことが書かれ[115]、これらは都市としてのヨークを指している。続く1069年、デンマーク王スヴェン＝エストリスソン（Swein Estrithson, King of Denmark）の息子たちがヨークを目指し、後にウィリアム1世がヨークシャーを目指して彼らを追い払ったとある[116]。ここでは行政区分としてのヨークが示され、1072年における記述ではヨークの司教に任命される予定であったエゼルリックが亡くなったことが書かれる[117]。1072年の記述におけるヨークは、都市というよりむしろ司教区としてのヨークの性格が強い。1075年、ウスター年代記より、ヨークのシェリフがエドワード証聖王の血縁者で、以前イングランド王位に推戴されたエドガー＝アシリング（Edgar the Ætheling）を歓待した[118]。1138年、ヨークを任されていたオマル伯ウィリアム（William, Count of Aumale）がスコットランド王デイヴィッド3世（David, King of Scotland）を撃退した[119]。上記2つの記述は、行政区分としてのヨークが示されている。

以上のように、年代記における「ヨーク」という言葉は複数の意味合いを持って記述された。ただし年代記においては時代を下るにつれて、「ヨーク」という言葉の持つ範囲が都市・地域から、行政区分ないしは司教区のような、より広範な地域を指すものへと変化していったのが見受けられる。

終章　「ヨーク」の変化の検討

ヨークシャーのドゥームズデイ＝ブックにおいて、ヨークの10人の内、ヨークシャーに所領を保有していないのにも関わらず、ヨークシャーのドゥームズデイ＝ブックにおいて特に名指しで権利の否定が行われているのかを含めて、改めて中世イングランドにおける「ヨーク」の地理的概念の変化を検討する必要がある。結論から述べると、「ヨーク」という言葉は当

初ノーサンブリア全体を意味する言葉であったのが、段階的に変化をしていき、11 世紀においては遂に行政区分としてのヨークへと昇華していく。第一段階として、7 世紀以前においては「司教座」としてのヨークと、「ノーサンブリア」としてのヨークが存在している。まず司教座としてのヨーク、これは年代記の 626 年に関する記述についてである。ここではエドウィンが洗礼を受けさせた場所がヨークであり、またベーダの教会史において聖ペテロの教会で行われたと記述している点から、ヨークをキリスト教会の拠点として、司教座として捉えていることが分かる(120)。

続く 685 年、教会史の記述との間に大分差異があるが、年代記にみられる、クスベルトが「ヨーク」における ヘクサムの司教に叙任されたとする記述が重要であろう。ここでは非常に距離の離れた二つの地点を結んでおり、ヨークをノーサンブリアの基点として、ノーサンブリアそのものを示す意味合いで使用しているように思える。また年代記と教会史には記述の差異が存在しており、これは年代記と教会史が作成された時期の、教会あるいは聖職者の、社会的な役割が異なっていたことに理由がある。年代記の編纂された時期は 12 世紀ごろであると見られるが、12 世紀の社会において司教は王が任命するものであったが、ベーダの時代においては司教、教会が人民を管轄した。司教、教会に対する観点がそもそも年代記の時代とベーダの時代でまったく異なっているために、年代記ではクスベルトへエクグフリス王が要請するという形を取っており(121)、教会史では真逆の、エクグフリス王がクスベルトの下へ赴くという記述になっている(122)。

「ヨーク」の用法の第二段階は、教会史の中に現れる。ベーダの記述において、「ヨーク」は司教座と司教区という二つの意味合いで描かれる。司教座としてのヨークについての記述は、エドウィンがヨークの教会で洗礼を受けたこと、教皇ホノリウス 1 世の書簡、エドウィンの首がヨークの教会で埋葬されたことなどから分かる。逆に司教区としてのヨークは、エクグフリス王の治世 8 年目に、デイラとバーニシアの二つの司教区が作られた点で現れる。記述を見返せば、デイラ王国の司教座がヨークに置かれたとあり(123)、これをそのまま援用すればデイラ王国を包含するヨーク司教区があったとみなすことができる。またこの司教区としてのヨークは、年代記の記述と照らし合わせると、教会史ではデイラ王国という範囲に限定しているが、年代記

におけるヘクサムの教会がヨークに属していたことを踏まえると、その時その時で属している教会によりヨークという言葉の表す範囲が流動的であるとも言える。8 世紀以降、特に 735 年におけるヨーク大司教座の成立に伴って、ヨークという言葉に新たな意味合いを持たせられるようになる。

そのことを示すのが、年代記における 738 年のエアドベルフトとエグベルトがヨークの教会に埋葬されたという記述と[124]、766 年のヨーク大司教へのエゼルベルフトの叙任の記述[125]であり、司教区としてのヨークを指し示している、741 年のヨークの炎上[126]、782 年におけるエゼルベルフトの逝去におけるヨークの記述[127]で、これらの記述は都市としてのヨークを示している。加えて 9 世紀における 867 年のヴァイキング襲来[128]、869 年のヴァイキング滞在[129]は都市としてのヨークであり、大司教座の成立に伴う「ヨーク」という都市が個別のものとして認識されていったことが伺える。10 世紀においては他方、都市ではなく領域としてのヨークが見受けられる。それは 918 年におけるエゼルフレーダと「ヨークの人々」の関係性であったり[130]、923 年におけるラグナルのヨークでの勝利[131]、948 年におけるウェセックス王エアドレッドの背後を撃った「ヨークの軍勢」である[132]。これは都市としてのヨークというよりは、より広範な認識でのヨークであり、領域としてのヨークの混同が見られる。しかし、エゼルフレーダの記述はアビンドン年代記、エアドレッドを攻撃したヨークの軍勢はウスター年代記における記述であり、これまで基準としてきたピーターバラ年代記とは編集者が異なるため、そのために違いが生じていることは考えられる。

11 世紀以降、ヨークは遂に行政区分としての枠組みを得て、ヨークシャーとなる。1016 年におけるクヌート遠征の記述においてはリンカーンシャーからヨークへ向かったとあり[133]、ここでは都市としてのヨークを指し、1064 年におけるトスティへの反抗においても都市としてのヨークが現れている[134]。1066 年のハロルドのヨークへの移動[135]も都市としてのヨークである。行政区分としてのヨークは、1068 年におけるウィリアム 1 世の活動から現れる。この年の記述には、ウィリアムがヨークに入って多数のハンドレッドの人々を殺害したとある[136]。更に、1069 年にはデンマーク王の一族がヨークに入り込んでエドガー＝アシリングの活動に手助けしたのをウィリアムが「この州」に入り追い払ったとある[137]。ここでは地方行政

区分における上位区分たるシャイアと、その下位区分たるハンドレッドが成立したことが伺える。1072 年には司教座としてのヨークが登場するものの[138]、やがて行政区分としてのヨークへと同化されていった。

以上のことから、「ヨーク」という言葉は一つの都市区域を示すだけの場合から、イングランド北部一帯を示す場合にまでその表現の幅が非常に大きい。アングロ＝サクソンからスカンディナヴィアの時期を経て、アングロ＝ノルマンの時代に至ってヨークという言葉はノーサンブリア全体を指す言葉から、行政区分と都市の両方を表す言葉に意味合いが変化していった。このような用法の変化を踏まえたうえで、第 2 章においてとりあげたヨークの 10 人がなぜ「ヨークの」と呼ばれているのか、という点について再検討すれば、「ヨーク」の意味合いが広範に及ぶことにより必ずしもヨークシャーに限定する必要は無いと言える。10 人の中でヨークシャーに所領が無くてもヨークシャーのドゥームズデイ＝ブックに記述が成されたのは、ヨークという言葉の意味内容がヨークに限定されなかったからであり、その点ではヨークにこだわる必要が無かったからである。

ヨークシャーでのドゥームズデイ＝ブックの作成は土地保有権を確定する過程で、ロンドンから見た茫漠とした領域のヨークシャーを確定させようとした行為でもある。ブックの範囲内でヨークシャーの領域を確定する行為は、長らく境界域として不透明性の高かったイングランド北部の領域をウィリアム 1 世の王権へと組み込み、支配をより確実なものにするための行為であったと捉えることが出来る。とはいえヨークシャーのドゥームズデイ＝ブックに見られる「ヨークの 10 人」は、アウティの息子トキがヨークシャーに土地を持たないのに記載されたことからも分かるように、必ずしもヨークやヨークシャーに限定してデータが収集されたことから、司教区のような限定的な用法ではなく、旧来の「北部」としての地理的認識に依るものであった。これはヨークシャーのブックが作成された当時ではいまだヨークは漠然として北部として捉えられていたことを示している。ウィリアム 1 世の治世に限って言うならば、ヨークの範囲はいまだ画定されたものではなかったと言うことが出来る。

ヨークの用法が時代と共に変化していったのは史料上の記述の仕方から明らかである。当初はイングランドとスコットランドの文化の境界域であるた

めイングランド北部を漠然と示す言葉であったのが、徐々に司教区、やがて行政区分を示すものとして見なされるようになった。その背景にはベーダが着目したような司教座都市としてのヨークの地位があり、その司教座都市ヨークが管轄する領域がヨークシャーの範囲に変遷していった。ヨークの10人はその点でヨークの範囲が不透明であった時代の名残であり、同時にブックに記載された無関係な人間の記述はヨークが都市から領域を指す概念へと決定的に変化する過渡期にあった証左である。ウィリアム1世はドゥームズデイ＝ブックの作成を通してヨーク、ヨークシャーの範囲を固めていくことでイングランド北部を自身の王権へ組み込んでいったと考えられるが、その実証には更なる分析が必要であろう。

註

(1) 赤沢計真「イギリス中世地方行政と州共同体」、『人文科学研究』、70、1986年、86頁

(2) 同上、88頁

(3) 同上、89頁

(4) 同上、91頁

(5) 同上、93頁

(6) 同上、103頁

(7) 赤沢計真「イングランド中世の国家権力と州共同体」、『人文科学研究』、69、1986年、77頁

(8) 同上、78頁

(9) 同上、81頁

(10) 同上、83頁

(11) 同上、84頁

(12) D. Rollason, *Northumbria, 500-1100,* Cambridge, 2003, p. 212

(13) *Ibid.*, p. 213

(14) ランカシャー、ウェストモーランド、カンバーランド、南西部スコットランドの総称のことで、ノーサンブリアの最大版図に含まれる。

(15) D. Rollason, *op. cit.*, p. 213

(16) *Ibid.*, p. 214

(17) *Ibid.*, p. 215

(18) *Ibid.*, p. 215

(19) *Ibid.*, pp. 231-233

(20) D. M. Palliser, *Medieval York 600-1540,* Oxford, 2014, p. 53

(21) *Ibid.*, p. 54

(22) *Ibid.*, p. 55

(23) *Ibid.*, p. 61

(24) ノーサンブリアの伯シワード（生年不詳～ 1055）はクヌートがイングランドを統治した時代にイングランド北部の大部分を支配した有力な伯で、現在のヨークシャーに相当する領域のほとんどを支配した。

(25) M. Townend, *Viking Age Yorkshire,* Croydon, 2014, p. 146

(26) L. Abrams, 'Diaspora and Identity in the Viking Age', *Early Medieval Europe,* 20, 2012, p. 24

(27) D. M. Palliser, *op. cit.,* p. 148

(28) ライディング riding はヨークシャーにおける行政区分の名称・単位であり、2022 年現在でも East Riding of Yorkshire として行政区分名に残っている。同地域はハンバー川河口部の主要港キングストン＝アポン＝ハルを擁する。またタウンエンドはライディングの起源を古ノルド語のスリズユングル þriðjungr であると考えている。þriðjungr 自体は「3 つに分ける」という意味を持つ。

(29) M. Townend, *op. cit.,* pp. 161-162

(30) *Ibid.*, p. 162

(31) 実際の記述においては「これらは利益を得る権利、裁判権、徴税権、王より与えられた保有権、また全ての慣習的な権利をエドワード証聖王の時代に保有していた。Earl のハロルド、メルレ＝スヴェン、ウルフ＝フェンマン、トルゴット＝ラグ、アウティの息子トキ、エドウィン、モーカはゲルド徴集権を保有する土地においてのみ、オズベオルトの息子ガマルはコッティンガムの地においてのみ、コフセはコックスウォルドの地においてのみ、またクヌートも先に挙げた権利を保有する。これらの内、罪を犯した時王と earl を覗いて何人にも罰金を支払うことは無かった。」とされている。A. Williams, *Yorkshire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio298v

(32) A. Williams, *Gloucestershire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio162, 163, 164

(33) A. Williams, *Cheshire Domesday Book ,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio265

(34) A. Williams, *Shropshire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London , 1988, Folio257

(35) A. Williams, *Herefordshire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London,

1988, Folio179, 179v, 180

(36) A. Williams, *Somerset Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio87

(37) A. Williams, *Devonshire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio101

(38) A. Williams, *Cornwall Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio122

(39) A. Williams, *Lincolnshire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio362v

(40) A. Williams, *Yorkshire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio325v

(41) A. Williams, *Gloucestershire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1989, Folio168

(42) A. Williams, *Cornwall Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio121v

(43) A. Williams, *Lincolnshire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio354v

(44) *Ibid.*, Folio352v

(45) *Ibid.*, Folio336

(46) A. Williams, *Shropshire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio253v

(47) A. Williams, *Herefordshire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio180v

(48) *The Anglo-Saxon, Chronicles,* London, ed. M. Swanton, 2000, p. 190

(49) A. Williams, *Yorkshire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio299

(50) A. Williams, *Cheshire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio265

(51) A. Williams, *Shropshire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio253v

(52) A. Williams, *Herefordshire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio179v

(53) *The Anglo-Saxon, Chronicles,* p. 197

(54) G. R. Owen-Crocker, *King Harold Ⅱ and The Bayeux Tapestry,* Woodbridge, 2005, p. 31

(55) A. Williams, *Yorkshire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio317

(56) *Ibid.*, Folio316、またウィリアム 1 世の代に改めて保有権者として現れるガマルもおり、*Ibid.*, Folio316v にその別なガマルの記述が存在する。

(57) コフセはA. Williams, *Lincolnshire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio363 に、クヌートは A. Williams, *Lincolnshire Domesday Book,* Alecto Historical Edition, London, 1988, Folio347v にそれぞれ土地を保有していたことが記録されている。

(58) D. Roffe, *Decoding Domesday,* Martlesham, 2007, p. 72

(59) Bede, trans. J. McClure, R. Collins, *The Ecclesiastical History of the English people,* Oxford, 2008, p. 97

(60) The Anglo-Saxon, Chronicles, 2000, p. 69

(61) D. M. Palliser, *op. cit.,* p. 53

(62) *Ibid.*, p. 53

(63) D. Rollason, *op. cit.,* p. 215

(64) R. Hall, *English Heritage Book of Viking Age Yorkshire,* London, 1994, p. 16

(65) D. Rollason, *op. cit.,* pp. 215-216

(66) *The Anglo-Saxon, Chronicles,* London, 2000, p. 112

(67) M. Townend, *op. cit.,* p. 160

(68) *Ibid.*, p. 161

(69) *The Anglo-Saxon Chronicles,* pp. 190-191

(70) M. Townend, *op. cit.,* p. 162

(71) *Ibid.*, p. 162

(72) D. M. Palliser, *op. cit.,* p. 59

(73) *Ibid.*, p. 59

(74) *Ibid.*, pp. 60-61

(75) *Ibid.*, p. 63

(76) *The Anglo-Saxon, Chronicles,* p. 174

(77) *Ibid.*, p. 185

(78) *Ibid.*, pp. 190-191

(79) *Ibid.*, p. 190

(80) Bede, *op. cit.,* pp. 55-56

(81) *Ibid.*, p. 97

(82) *Ibid.*, p. 102

(83) *Ibid.*, p. 105
(84) *Ibid.*, p. 106
(85) *Ibid.*, p. 163
(86) *Ibid.*, p. 164
(87) *Ibid.*, p. 174　この記述の年代については、「ノーサンブリア王オスウィウの権力が広がるところまで」という記述があることから、オスウィウの在位期間 642 年から 670 年をベースとし、ウィルフリッドがヨーク司教であった期間が 664 年から 678 年であったので 664 年から 670 年の間の時期にウィルフリッドがイングランド北部地域の広い領域の司教任免権を確保したと考えられる。
(88) *Ibid.*, p. 191
(89) *Ibid.*, p. 226
(90) *Ibid.*, p. 239
(91) *Ibid.*, p. 244
(92) D. M. Palliser, *op. cit.,* p. 56
(93) *Ibid.*, p. 56
(94) *Ibid.*, p. 57
(95) *Ibid.*, p. 57
(96) *The Anglo-Saxon, Chronicles,* p. 25
(97) *Ibid.*, p. 39
(98) *Ibid.*, p. 45
(99) *Ibid.*, p. 45
(100) *Ibid.*, p. 51
(101) *Ibid.*, p. 51
(102) *Ibid.*, pp. 51-52
(103) *Ibid.*, p. 53
(104) *Ibid.*, p. 57
(105) *Ibid.*, p. 69
(106) *Ibid.*, p. 71
(107) *Ibid.*, p. 105
(108) *Ibid.*, p. 105
(109) *Ibid.*, p. 112
(110) *Ibid.*, p. 148
(111) *Ibid.*, p. 163
(112) *Ibid.*, p. 184

(113) *Ibid.*, p. 190
(114) *Ibid.*, p. 195
(115) *Ibid.*, p. 202
(116) *Ibid.*, pp. 202-203
(117) *Ibid.*, p. 208
(118) *Ibid.*, p. 210
(119) *Ibid.*, p. 266
(120) Bede, *op. cit.,* p. 97
(121) *The Anglo-Saxon, Chronicles,* p. 39
(122) Bede, *op. cit.*, p. 226
(123) *Ibid.*, p. 191
(124) *The Anglo-Saxon, Chronicles,* p. 45
(125) *Ibid.*, p. 51
(126) *Ibid.*, p. 45
(127) *Ibid.*, p. 53
(128) *Ibid.*, p. 69
(129) *Ibid.*, p. 71
(130) *Ibid.*, p. 105
(131) *Ibid.*, p. 105
(132) *Ibid.*, p. 112
(133) *Ibid.*, p. 148
(134) *Ibid.*, p. 190
(135) *Ibid.*, p. 194
(136) *Ibid.*, p. 202
(137) *Ibid.*, p. 203
(138) *Ibid.*, p. 108